

山の自然と開発

厚生連滑川病院 小川 忠邦

今や地球規模で自然保護が叫ばれており、自然保護か開発かであちこちでもめたり、論議されたりしているが、それはそれとして私は身近なところでこの問題を考えてみたい。

私は山が好きで何十年も登山を続けているが、その山岳地域の開発ぶりは本当にすさまじいばかりである。何のために山に登るかといえば、人それぞれに色々な目的があるとしても、自然を求め、自然の中に浸り、そこから無形の何かを感じ取って心の糧とすることに多くの人の共通の思いがあるはずである。

富山県はすばらしい山岳に恵まれ、残された自然が多い点では全国でもトップクラスと云われているが、その広大な山岳地帯の至る所に人の手が入りこんで開発され、みるも無惨な姿になり果てているのが現状である。その元凶は何と云っても“車道”である。どこへ行っても山の奥深くまで林道が延び、山頂近くまで道路がつけられ、山を越え谷を渡って山の向こうの地域につながってまさにズタズタの有様である。

このような車道はそれぞれそれなりの目的をもって作られたはずであるが、こんなところに何の目的でつくられたのか首をかしげなくなる道路が多いのに驚く。しかも整備されずに放置され、利用できなくなったものも少なくない。大体富山県のような積雪地帯は、一年の半分は雪のため利用できないことが多く、しかも急斜面を削って作られた道路は、雪のため一年で無惨な傷跡を残す。とにかく莫大な投資をして道路を作り、しかもその維

持管理に多大な費用をかけないと利用できないのである。経済効率から云えば実に馬鹿げた道路が多い。

本当に地元にとって必要な生活道路や治山治水、林業、学術調査などを目的としたものはともかく、山岳地帯に作られた車道の大半は単なる観光道路にすぎない。最近では全国に大規模なスーパー林道の類のものが多く作られあるいは計画されており、その他人の住まない各地の山岳地帯に大小様々の車道がまさに無数にあると云っていい。それらは地元や地域の活性化、産業振興あるいは失業対策といった大義名分で建設されたものが非常に多いと云われるが、実際には観光的意味合いの道路であって、まさに地域のエゴそのものである。「一体山を私物化しているのか」と怒りたくなる。よく林道の入口にゲートを張って一般車を閉め出しているところがあるが、誰でも入ると山が荒らされるとか、安全を保証できないとか云うのがその理由であるが、元々山に道路を作って荒らしておいて何をか云わんやである。これはある特定の地元の人の山の独占化、私物化の典型である。

そもそも山岳道路は国立公園の一部を除いて開発の規制はなく野放しである。我が国の山はまさに観光、金儲け、地元のエゴなどの犠牲にされて傷だらけになっているのである。日本の山は四季折々に風情があって実に美しい。そのような国民の財産である自然の美しさを、一部の人の金儲けの対象になったり私物化されたりして歪められたりしてはならな

い。私も観光開発を決して否定するものではないが、現在の道路を軸とした山岳観光開発は、歯止めがなくてあまりにも惨めな結果をもたらすだけである。

登山という行為は自然を対象とした無償の行為であるからこそ、あるがままの自然なくしては登山そのものが成立しない。今、中高

年を中心に登山人口が増えているが、便利さや金儲け主義と引き替えに失ったものへのせめてもの抵抗なのかもしれない。

今更このようなことを云ってもすでに手遅れであるが、とにかく諸悪の根源は、“車道”なのである。このことを我々皆が考えてみるべきではなからうか。